

【曲目解説】

*「ローマの謝肉祭」序曲

この曲は歌劇「ベンヴェヌート・チェルリーニ」の中の2つの主題を用いた演奏会用序曲として、1843年に作曲、翌年初演されています。この歌劇は当時大変な不評だったそうで、その巻き返しに本序曲を作曲したという話も伝わっています。演奏会用序曲とは、オペラや劇作品が後に続く序曲とは異なり、独立した曲でベートーヴェンから始まったジャンルのようなのです。なぜ独立した曲を序曲と呼ぶかは、いまだに研究対象になっているようでわかりませんが、コンサートの幕開けにふさわしい曲という理解でもよろしいのではないのでしょうか。

曲は、華やかな短い序奏に続いて、イングリッシュホルン（コーラングレ）によって、アリア「テレーザ、命よりも君を愛す」の旋律がゆったりとしたテンポで奏でられます。後半はイタリアの民族舞踊「サルタレロ」に基づいた非常に速いテンポの旋律となりいかにも謝肉祭らしい華やかな曲となります。このサルタレロという舞曲は、管弦楽曲ではメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」の第4楽章、レスピーギの組曲「ローマの祭」の終曲にも取り上げられていますが、共通性を感じられますでしょうか。

さて、作曲家は好みの楽器があるようでして、有名なのはモーツァルトのクラリネット、ブラームスのホルンでしょうが、アマチュアオケの管楽器奏者にとっては（一部の弦楽器奏者も）、そこそこの関心事で、選曲会議のときひそかに、時には堂々と期待したりしています。ベルリオーズについては誰も何も言っていませんが、個人的にはかなりのオーボエ、コーラングレ好きではないかと思っています。多くは大曲でなかなか演奏の機会がないので、ベルリオーズの実に優美な旋律をこの曲にて堪能いただければと思います。ちなみに筆者は、その隣でサルタレロの速い旋律に舌と指がもつれつつ演奏している側です。（TY）

*アルジェリア組曲

フランスの作曲家、カミーユ・サン＝サーンス（1835-1921）は当時の植民地アルジェリアに何度も訪れています。86歳で亡くなった時もアルジェリア旅行中でした。アルジェリアは地中海に面した北西アフリカの国ですが、この曲は彼が44～45歳の時、旅行の印象を基に作曲されたものです。

「アルジェの風景」

船が首都アルジェの港に着く時の、次第ににぎやかになっていく街の印象を描いています。サン＝サーンスは、楽譜に「En vue d'Arger」と書いていますが、手書きのvとrは混同されやすく、「vue」を「rue（英語のstreetに当たる）」として「アルジェの街中で」とする場合もあります。楽譜には「アルジェへの航海の模様を記す」と注釈があり、「街中で」は間違いだと書かれたものもありますが、ここで言う「航海」とは、船上のことだけでなく、「アルジェへの旅行」を指すとも解されるので、これをもって間違いとは言えないでしょう。いずれにしてもアルジェの街の様子を描いていることに代わりはありません。

「ムーア風狂詩曲」

ムーア人は北西アフリカに住むイスラム教徒の呼称です。この曲は異国情緒あふれる民族風の3つの舞曲がオムニバス風に現れます。

「ブリダにて、夕べの想い」

ブリダはアルジェの南西約50kmにある保養地として繁栄した街です。サン＝サーンス自身が「愛の歌」と呼んでいた主要主題が繰り返し奏でられますが、最初に独奏ヴィオラが、この主題を奏でます。管弦楽曲で独奏ヴィオラが旋律を弾くのは極めて珍しいことです。これは私見ですが、アルジェリアには、山羊の革を貼った瓢箪に一本弦を張って弓でこすって演奏する「インザド」という民族楽器があり、この楽器の代用として独奏ヴィオラを用いたのではないかと思います。

「フランス軍隊行進曲」

この楽章は、独立して吹奏楽などでよく演奏されます。少しとぼけたフランス軍隊がアルジェの市中を行進する様子を、アクセントを多用してコミカルに描写しています。

（鷹）

*交響曲第1番 「冬の日の幻想」

チャイコフスキーの音楽は馴染み深いものが多いですか？メロディックで抒情的で頭に残りやすい曲が多いですね。「白鳥の湖」らの三大バレエ音楽やヴァイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲など有名な曲が多く小さい頃から親しんでいるからでしょうか。チャイコフスキーを調べてみると、ドイツ音楽を基本とした理論でロシア音楽の魅力を伝えた最初のロシアの作曲家でした。音楽の感心もグレゴリオ聖歌からロシア聖歌、グルジア、アルメニア教会の聖歌、西欧ではバッハ、モーツァルトにわたり、また民謡にも興味を持ち、旅先では必ず民衆の歌や踊りを書きとめたようです。私たちの慣れ親しんだドイツ音楽に日本に近いロシアや東欧の民謡が合わさっていることが、チャイコフスキーが馴染み深いものとなっている理由かもしれません。

交響曲1番はチャイコフスキーが1866年26歳の時に書いた最初の交響曲です。第1稿の評価が悪く、第2稿で全曲初演、その後第3稿がスコアとして出版され、現在一般的に演奏される版となっています。第3稿のパート譜出版は1888年で、実に22年の時間がたっています。アンサンブル・ディマンシュでは25年前の1991年2月にこの曲を演奏しています。チャイコフスキーは駆け出しの時から作曲家として世に認められるまで成長しています。私たちは久しぶりに取り組んだこの曲に25年前と同じような愛情と苦労を掛けましたが、楽譜からの読み取り少しは深まっていると思います。前回からどれだけ成長したところをお聞かせできるでしょうか。

「冬の日の幻想」と副題がついているこの曲からは様々な冬の情景が浮かんできます。「冬の旅の夢想」と題のついた1楽章は、粉雪が舞うような弦楽器のトレモロから始まります。フルートとファゴットが冷たい風の流れを感じさせると、ピチカートや木管のスタカートで雪の結晶がキラキラしている様子を奏でます。クラリネットから始まる対照的な長調の第二主題は、暖かい暖炉の前でくつろいでいるようです。2楽章は「陰気な土地、霧の土地」と題されています。弱音器をつけた弦による導入主題はロシア正教の祈りを思わせる静謐な響きがします。決して「陰気」ではなく「神聖」な冬の自然が描かれます。オーボエによる第一主題はその自然の中でたんたんと小さな喜びを糧に生きている人間の歌のようで、ヴィオラとフルートで受け継がれた甘く切ないメロディーは暖かい日に包まれた冬景色が見られます。チェロ、ホルンと第一主題は繰り返され、最後は雄大な自然美が描かれます。3楽章は、雪の冷たい妖精が舞うようなワルツ。ピチカートやアクセントにより活き活きとした躍動感があります。トリオは長調に転じ、チャイコフスキーお得意のワルツになっています。ヴァイオリンとチェロの息の長い旋律は別世界の暖かい宮殿を思い起こさせます。4楽章ではロシア民謡「花が咲いた」に基づかれています。冒頭では悲しく響き、心からの哀愁を呼び起こすそのメロディーはその後、民衆の喜びを表すかのような底抜けの陽気さを抱いたコサックダンスの装いになります。その間、弦楽器のフーガによる冬の嵐が曲を引き締めるとともに、演奏が「嵐」にならないよう奏者も一層の注意を払う箇所でもあります。コーダはトゥッティによって自然への賛歌が延々と続く長大なものとなっています。(A I)

【アンサンブル・ディマンシュ】

第1 ヴァイオリン	；石嶺寿子	佐藤克哉	三瓶政一	関根佳子	☆時山響子
第2 ヴァイオリン	；荒川奈月	長澤 澄	西村 実	松島和彦	♪森 未知
ヴィオラ	；柴野かおり	下山純也	♪関口孝司郎	千秋和久	山口 彰
チェロ	；佐藤 翔	久野慶彦	三次摂子	♪山内美佐子	
コントラバス	；江川博之	♪須賀敬亮			
フルート	；徳植俊之	持木若菜	米山典子		
オーボエ	；市川亜理	山口高司			
クラリネット	；浅井昭成	鈴木千暁			
ファゴット	；越島康太郎	吉澤輝彦			
ホルン	；尾形武一	小磯 治	花田康紀	町田明子	森合利之
トランペット	；柿原順子	菅沼伸陽	多賀亮介	平野勇氣	
トロンボーン	；桜田健彦	松本 啓	三次 亮		
チューバ	；石崎雅人				
ティンパニ	；星野武徳				
パーカッション	；近藤よしの	相馬啓亮	柳沢萌子		
☆コンサートマスター		♪弦楽パートトップ			